名桜大学紀要，(22)：55-62（2017）

【学術論文】

離島における体験活動が児童に与える影響

Effectiveness of Experience Activities on Remote Islands for Elementary School Students

平　野　貴　也

要旨

本研究は沖縄県における離島を活用した体験活動の取り組みが，児童に与えた影響について明らかにすることを目的とする。２泊３日の沖縄離島体験交流促進事業に参加した２小学校の５年生194名を対象とした。調査には離島における体験活動の評価尺度と離島に対する理解に関する項目を用いた。因子分析の結果，離島を活用した体験活動の教育効果として「自主性」「対人関係」「協調性」「自己統制」の４つの下位尺度が得られた。

プログラム前後ではすべての項目の平均得点が増加しており，因子得点に変化が見られた。さらに離島への理解についても変化が見られており，児童の離島への理解が促進されていることが確認できた。しかし，その変化の理由と影響の要因を明らかにするためには，さらなる質的研究が必要であるという課題を示した。

キーワード：離島　体験活動の効果　児童

Ⅰ．はじめに

沖縄県は広大な海域に点在する豊かな自然環境や個性ある伝統文化を持つ39の有人離島から構成されている。沖縄離島体験交流促進事業は沖縄県の政策に示されている沖縄21世紀ビジョンの取り組みの一つとして沖縄本島と離島の交流を促進し，離島の特性を教育に活用し，離島地域の活性化を図るアクションとして2010年から実施されている。沖縄離島体験交流促進事業は沖縄県企画部地域・離島課が主催し，沖縄県旅行・観光事業協同組合と(株)カルティベイトの共同企業体が業務受託・運営を行っている。この事業は沖縄県の将来を担う児童が，離島の重要性，特殊性及び魅力に対する認識を深めるとともに，沖縄本島と離島との交流を促進することにより，離島地域の活性化を図ることを目的に実施されている。

具体的な活動は沖縄本島の小学５年生が，県内の離島に２泊３日宿泊し，自然・歴史・生活・文化・生業などを体験することであり，民泊を活用するなど離島の児童や住民と交流を図る活動が盛り込まれている。中央教育審議会（2007）は体験活動を「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として，体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」と定義している。沖縄離島体験交流促進事業における活動は教育活動の一環として小学校単位で計画的に実施されており，離島環境を活用した教育的な効果を意図している活動であり，体験活動と位置付けることができる。

2008年に公示された学習指導要領では，教育内容の主な改善事項の１つとして，子どもたちの社会性や豊かな人間性をはぐくむために「体験活動の充実」がかかげられており，子どもたちの発達段階に応じた集団宿泊活動や自然体験活動，職場体験活動が推進されている。それに伴って近年，体験を通じた学びが重要視され，野外宿泊体験，長期宿泊体験，農山漁村の生活体験，地域の環境を生かした体験など多様な体験活動が実施されており，その効果や有効性の検討がなされている。中央教育審議会（2013）では，これらの教育効果について「青少年の体験活動の定義・意義・効果について」の中で生活・文化体験活動，自然体験活動，社会体験活動などの体験活動を通じて「社会を生き抜く力」の養成，自然や人とのかかわり，規範意識・道徳心等が育成される等の多岐にわたる児童への影響を挙げている。

しかし，体験活動は自然体験，宿泊体験，生活体験，職場体験など単一の活動ではなく，多様な活動が含まれる一連のプログラムである。例えば野外活動施設で数日

間，宿泊してプログラムを行う体験活動の場合，自然体験でもあり，宿泊体験でもあり，生活体験でもあるため複数の要素を併せ持つプログラムとなる。そのため児童に影響を与える要因や生み出される効果は多様で，その効果を測定し，特定することを難しくしている。

文部科学省は豊かな体験活動推進事業の政策評価(2009）の中で「評価結果は妥当」としながらも，「指標と目標に関して，体験活動の教育的効果を捉えるようなアウトカム的なものについても検討する」と体験活動を評価する項目について検討する必要性について述べており，効果を捉える指標の不十分さを指摘している。また農山漁村の長期宿泊体験による教育効果の評価結果について（2010）では「分析を進めて行く過程で様々な要因が絡み合った結果，調査結果と要因の分析が困難である評価項目が存在することも分かった」と記載しており，プログラムに応じた調査項目の策定を示唆している。これらのことからも多様な活動を実施するプログラムの効果を比較し，検討するにはプログラムに応じた質問項目を作成する必要がある。そのための取り組みとして本研究では，主に教育効果および離島に対する理解の変容について調査を行い，沖縄県における離島を活用した体験活動の取り組みが児童に与えた影響について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法

１．対象者

2015年５月に開催された沖縄県旅行・観光事業協同組合と(株)カルティベイトの共同企業体が実施した沖縄離島体験交流促進事業に参加した２小学校の５年生194名を対象とした。そのうち，データの不完全な者を除き，すべての回答が得られた参加前調査（Pre）154名，参加後調査（Post）154名を本研究の分析対象とした。引率教員および保護者にも参加後の調査を実施したが，今回は児童対象のデータのみを分析に用いた。

２．体験活動の概要

本事業は学年単位で実施されており，学校間で内容は少し異なるがおおむね，１日目午前中と３日目の午後は離島への公共交通機関を利用した移動であった。１日目午後，２日目及び３日目午前に家業体験，生活体験，自然体験，島の人や地域の小中学校と交流で構成されていた。ホテルや民宿などを宿泊先として活用した小学校もあるが，今回の対象校の宿泊形態はともに民泊であった。

３．調査内容

調査は学校ごとに，なるべく参加直前直後に実施した。調査内容は属性（５項目），教育効果（22項目），離島に対する理解（13項目），活動内容の評価（Postのみ４項目）であった。

教育効果及び離島に対する理解に関する項目の作成には2014年に実施された離島体験交流促進事業の中で(株)カルティベイトが実施した児童に対する自由記述回答の分析を用いた。手順の概略は，まず240名の自由記述から文意の理解できる595文を教育効果と離島の理解に選別した。つぎに小学校教諭２名，教育学を専門とする大学教員１名，体育学を専門とする教員１名の4名によってKJ法を用いて文章のグルーピングを行った。教育効果については11に分割されたグループごとの内容を反映するように22の質問項目を作成した。また離島に対する理解ついては記述の多かった７グループから離島の魅力６項目，離島での生活で最も不便そうに思うこと7項目を作成し，調査項目とした。

４．分析方法

因子の構造を明らかにするために因子分析を行った。また参加前後の効果，測定時期を水準とする分散分析を行った。なお分析にはSPSS 20.0 for Windowsを用い，統計処理を行った。

５．倫理的配慮

各学校への活動参加に対する説明の際に，調査主旨，調査方法，調査内容，倫理的配慮について説明を行い，同意を得た。調査への協力は自由意志であること，回答しなくても不利益は生じないこと，データは個人が特定されることがないように処理すること，データの管理は厳重に行うことを調査用紙に明記した。調査の実施に際しては，調査者が事前に口頭で説明を行い，回答を持って同意したとみなした。

Ⅲ．結果及び考察

１．属性

対象者の属性は男性53.2％，女性46.6％であった。離島を訪れたことのない児童は48.1％と半数近くであり，離島体験を実施した離島を訪れたことのない児童は81.8％であった。また１週間のうちに運動部活動やスポーツクラブなどで授業以外に身体活動を実施している児童は60.4％，運動以外の習い事を行っている児童は50.6％であった（表１参照）。

表１　属性

項目	区分	人数(n=154)	%
性別	女性	82	53.2
	男性	72	46.8
離島に来た回数	ない	74	48.1
	１回	31	20.1
	２から４回	30	19.5
	それ以上	19	12.3
体験実施の離島への来た回数	ない	126	81.8
	１回	17	11.0
	２から４回	6	3.9
	それ以上	5	3.2
１週間の運動	実施しない	61	39.6
	１から２日	29	18.8
	３から４日	38	24.7
	５から６日	14	9.1
	毎日	12	7.8
１週間の習い事	なし	76	49.4
	１から２日	44	28.6
	３から４日	22	14.3
	５から６日	7	4.5
	毎日	5	3.2

２．児童に与えた影響

１）教育効果項目の分析

質問項目の構造を明らかにするために，参加前に実施した調査結果に対し，因子分析を行った。各項目の回答には「あてはまらない」から「あてはまる」を順に１点から４点の得点を与え，各項目の平均値，標準偏差を算出し，表２に示した。天井効果の見られた３項目を削除し，次に19項目に対し主因子法Promax回転による因子分析を行った。因子負荷量が0.40未満であった項目を除外し，同様の分析を繰り返した。その結果，４因子14項目を抽出し，教育効果を示す項目とした。なお回転前の寄与率は61.2％であった。

第１因子は「よいと思うことは自分から進んでやる」「自分のことは自分でする」など自分から行動する内容の項目が高い負荷量を示したので「自主性」因子と命名した。第２因子は「きまりやルールを守る」「その場にふさわしい行動をする」など周囲の状況を読み取り，行動する内容が見られたことから「協調性」因子と命名した。第３因子は「相手の立場になって考えることができる」「誰とでも仲良くできる」などお互いの関係性を保つ項目が高い負荷量を示したことから「対人関係」因子，第４因子は「言われなくても家のお手伝いができる」「苦手なことでも我慢して取り組む」など自分の行動をコントロールする項目が見られ「自己統制」因子と命名した。文科省の行った農山漁村での長

表２　教育効果項目と因子構造

質問項目	抽出因子					
	平均値	標準偏差	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
自主性						
よいと思うことは，自分から進んで行う。	3.16	0.72	0.69	-0.15	0.29	-0.08
自分のことは自分でする。	3.05	0.90	0.66	0.24	-0.11	-0.22
腹が立ってもがまんすることができる。	3.06	0.79	0.52	0.19	-0.29	0.27
わからないことはすぐに人に頼らず自分で調べる。	3.08	0.80	0.47	-0.17	0.03	0.26
自然環境に関心がある。	2.93	.971	0.43	0.25	0.12	-0.18
協調性						
きまりやルールを守る。	3.26	0.74	0.03	0.77	0.03	-0.06
その場にふさわしい行動をする。	3.13	0.70	0.04	0.62	0.08	0.21
人の話をきちんと聞く。	3.22	0.77	-0.01	0.44	0.08	0.29
対人関係						
相手の立場になって考えることができる。	3.12	0.83	-0.09	0.10	0.75	-0.07
誰とでも仲良くできる。	3.29	0.61	0.04	-0.07	0.50	0.15
「ありがとう」と素直に言うことができる。	3.37	0.60	0.08	0.16	0.45	0.04
自己統制						
言われなくても家のお手伝いができる。	3.10	0.85	-0.24	0.04	-0.02	0.73
苦手なことでも我慢して取り組む。	3.10	0.75	0.16	-0.01	0.18	0.54
物やお金を大切にする。	3.15	0.75	0.16	0.02	0.03	0.45
	因子間相関		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
	Ⅱ		0.57**	－		
	Ⅲ		0.49**	0.38**	－	
	Ⅳ		0.61**	0.57**	0.50**	－
	Cronbach　α		.725	.792	.650	.648

** p<.01

期宿泊体験の調査でも「自主性」「人間関係・コミュニケーション能力」などの因子が抽出されており，宿泊を伴う本活動の因子として妥当と考える。また生きる力の評定尺度において自然体験活動が「協調性」「自己規制」などに関する関心や態度に影響を及ぼすことが明らかになっており，離島での体験活動や交流活動からこれらの因子が抽出されることは妥当であると考える。なおCronbachのα係数を算出したところ，高くはないがある程度の内的整合性が得られている。

２）教育効果得点の体験前後の比較

体験活動への参加前後の差異を検討するため，因子ごとの平均得点，標準偏差を算出し，比較を行った。その結果，すべての因子得点の平均値に向上が見られ，「自主性」「自己統制」には統計的に有意な差が見られた。集団生活や民泊などの場面において自分で判断して行動し，自分をコントロールしなければならない場面に遭遇することも多く，体験活動によって社会生活を送る上でのスキルに向上したと考えることができる（表３参照）。

表３　教育効果得点の比較

因子	参加前		参加後		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自 主 性	2.97	0.60	3.18	0.62	-1.94*
協 調 整	3.15	0.62	3.25	0.57	-1.37
対人関係	3.08	0.58	3.10	0.64	-0.31
自己統制	3.18	0.57	3.40	0.53	-3.46***

n=154　　*　p<.05　　***　p<.001

ただ一方で内的整合性が0.7以上でない因子があったこと，体験前後において２つの因子に統計的な変化が見られなかったことから，尺度構成を検討すべきである。今回は昨年度の記述をもとに項目を作成したが，より精度の高い調査を実施し，その変化の理由と影響の要因を明らかにするためには，さらなる質的研究を行い，尺度構成を見直す必要があろう。

なお谷井ら（2001），佐藤（2002），中川ら（2005）の先行研究において自然体験活動や運動部活動などの身体活動に参加することで「生きる力」に有意な向上が見られている。そのため日常生活での身体活動との関係性を見るために、下位尺度得点を従属変数として時間（体験前・体験後）×身体活動の２要因分散分析を行った。その結果「自主性Ｆ(1,304)＝2.98，ｐ＜.05)」と「協調性（Ｆ(1,304)＝2.97，ｐ＜.05)」において，時間と身体活動に有意な交互作用が認められた。

「自主性」については普段からスポーツなどを行っていない身体活動無群は体験前（M＝2.99, SD＝0.57）から体験後（M＝3.20，SD＝0.54）において得点が有意に高まった。しかし身体活動有群は体験前（M＝2.93, SD=0.64）から体験後（M＝2.90，SD=0.68）において得点の変化は見られなかった。「協調性」についても同様で身体活動無群は体験前（M＝3.18，SD＝0.58）から体験後（M＝3.37，SD＝0.50）において得点が有意に高まったが，身体活動有群は体験前（M＝3.12, SD＝0.68）から体験後（M＝3.07，SD＝0.62）において得点の変化は見られなかった。

「対人関係」と「自己統制」は時間と身体活動に有意な交互作用は認められなかったが，「対人関係」「自己統制」ともに身体活動の主効果が有意であり，「自己統制」については時間の主効果が有意であった。

これらから，運動部活動などで定期的に身体活動を行っていない者に多くの効果が見られたことがわかる。尺度構成が異なるため一概に比較はできないが、長期キャンプや自然体験活動においてもこうした社会的スキルに関連した項目の向上は報告されている。ただ定期的な身体活動を行っている者は活動に参加する前から得点が高く、参加後に変化が見られなかったとも考えられ、一概に今回の活動による効果であると断定することはできない。こうした変化が今回の活動によるものなのか、普段の生活によるものなのか明らかにするには対象群を設け、変化の要因を検討する必要がある。

表４　得点平均と分散分析（身体活動×時間）

因子	身体活動の状況	事前		事後		主効果				交互作用	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	身体活動		時期			
自主性	身体活動有	2.93	0.64	2.90	0.68	6.69	**	1.55	*ns*	2.98	*
	身体活動無	2.99	0.57	3.20	0.54						
協調整	身体活動有	3.12	0.68	3.07	0.62	7.17	**	0.95	*ns*	2.97	*
	身体活動無	3.18	0.58	3.37	0.50						
対人関係	身体活動有	2.98	0.65	2.91	0.77	11.95	**	0.00	*ns*	1.25	*ns*
	身体活動無	3.15	0.51	3.23	0.51						
自己統制	身体活動有	3.14	0.57	3.23	0.59	9.41	**	7.79	**	2.77	*ns*
	身体活動無	3.21	0.57	3.51	0.45						

*　p<.05　**　p<.01

３．離島の理解

１）離島の魅力

児童が感じる離島の魅力が活動への参加前後でどう変化したかについて調査を行った。昨年度の調査から得られた６項目について，各項目の回答に「思わない」から「思う」の順に１から４点と得点を与えた。その平均値と標準偏差を算出し，離島体験前後で得点を比較したところ，表５より「自然環境」「本島ではできない体験」「人とのふれあい」「ゆったりした時間」の４項目の得点にｔ検定において有意な差が見られた。「自然環境」「本島ではできない体験」の得点は増加しており，「人とのふれあい」「ゆったりした時間」の得点は減少した。

海や気候などの自然環境の違い，本島ではできない体験の活動についてはプログラム内容に満足な評価が得られている。藤村・水野（2012）は離島における民泊体験型観光の効果として経済的な効果はもちろんであるが，受け入れ側の効果として「島民同士の交流が深まった」「若者たちとの交流は楽しい」「島や地域の良さを認識できた」などビジターと受け入れ側の交流をその効果としてあげており，「人とのふれあい」は離島での体験活動を実施する上で重要な要素であると思われる。「人とのふれあい」という設問に対する児童の理解や設問の表現方法にも検討の余地がある。また現在も民泊や交流活動など児童が離島の住民と「ふれあう」機会は設けられているが，これらの活動時間をさらに確保することは困難な実情にある。そのため，小学校における事前学習や民泊を受け入れる際の研修などにおいて民泊での時間の共有方法や児童への接し方などを工夫することで，お互いの理解が促進され「人とのふれあい」に関する評価が向上するのではないかと推測する。

なお滞在中はできるだけ多くの体験活動が実施できるようにプログラム作りが行われている。児童が事前にイメージしたであろう離島ならではの，ゆったりとした時間や風土を感じる時間を確保することは困難であるし，本活動の趣旨から外れている。そのため，児童の感想から選抜された質問項目ではあったが，本活動を評価する項目としては不適切であったと考える。

２）離島での生活で不便そうに思われること

次に離島の生活で最も不便そうに思われることについて調査を行った。離島での生活について事前調査では最も不便に思うことを予測してもらい，参加後には離島体験活動を通じて最も離島で不便そうに思ったことを一つだけ選択してもらう形式で回答を求めた。

χ２検定の結果，参加前後の回答と不便に思うことには有意な関連性（χ^2＝43.71,df＝7,p<.001）が見られた。「病院の規模や数」「買い物の場所」などは増加をしており，「台風の被害」「交通の便」などは減少を示し，認識に変化が見られた。

病院の数の少なさやコンビニや大型スーパーが少ないことなどに児童は不便さを感じたと思われる。また台風時には体験活動を行っていないため，実際に離島での台風を経験しておらず，荒天時の船や航空機での不便さは経験していないため，これらの項目が減少したのではないかと推測される。「その他」の項目では「虫が多い」「日に焼ける」などの記述がみられた。

表６　離島での生活で最も不便そうに感じることの比較

	参加前(n=154)		参加後(n=154)		参加後－参加前の増減割合
	人数	%	人数	%	
病院の規模や数	31	21.13%	53	34.42%	13.3%
買い物の場所	11	7.23%	32	20.78%	13.6%
台風の被害	31	20.20%	13	8.44%	-11.8%
交通の便	31	21.13%	17	11.04%	-10.1%
情報の入手	10	6.55%	2	1.30%	-5.3%
人の少なさ	20	12.99%	16	10.39%	-2.6%
進学先の選択や数	15	9.74%	14	9.09%	-.6%
その他	2	1.30%	7	4.55%	3.2%

自由度７　　χ^2値＝43.71　p<.001

表５　離島の魅力

項　　目	参加前		参加後			
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	ｔ値	
本島とは異なる自然環境	3.68	0.48	3.83	0.54	-1.89	*
人とのふれあい	3.58	0.66	3.42	0.71	1.95	*
離島でしかできない体験	3.70	0.46	3.85	0.49	1.98	*
名産品・特産物	3.50	0.69	3.54	0.68	-0.50	
ゆったりした時間	3.64	0.64	3.35	0.82	3.40	**
名所・観光地	3.58	0.70	3.48	0.72	1.29	

n=154　　*　p<.05　**　p<.01

3）活動内容の評価

活動内容の評価として事後のみに本島との違いを理解, 島の人との交流, 来島の意図について回答を求めた。

本島との違いの理解については62.3％が「できた」と回答しており,「あまりできなかった」「できなかった」の回答の合計は4.5％であり，非常に高い理解が得られている。しかし島の人との交流は「できた」48.7％,「ややできた」37.7％と合計こそ86.4％ではあるが，本島との違いの理解と比較するとできた者の割合がやや低い。そのためプログラムを改善し，さらに理解を促す取り組みが望まれる。また再度，来島したいかを尋ねた項目では83.2％が「必ず来る」と回答しており，２泊３日という短い期間であっても強い来島の意図が見られた。これらのことから離島への理解, 沖縄本島と離島との交流，離島の活性化につながる内容が確認できた。

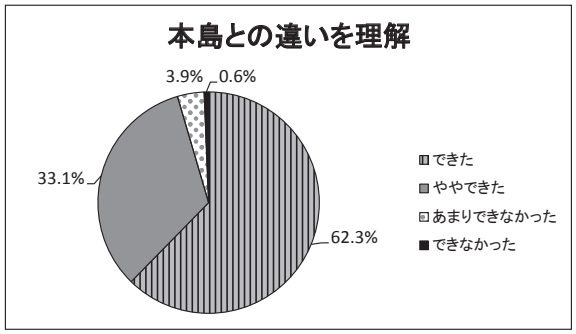

図１　本島との違いを理解

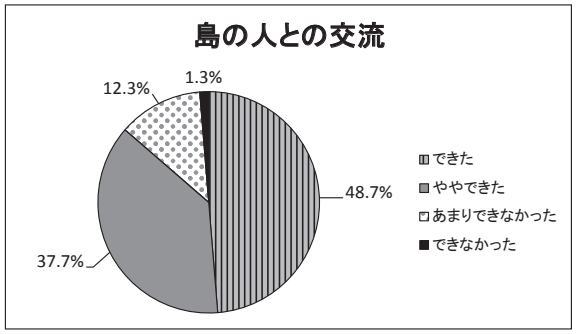

図２　島の人との交流

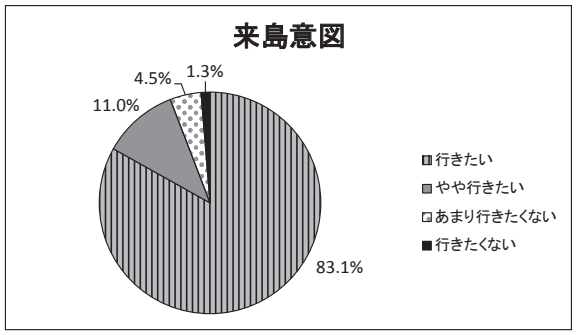

図３　来島の意図

Ⅳ．結論

離島を活用した体験活動である沖縄離島体験交流促進活動の効果として「自主性」「対人関係」「協調性」「自己統制」の４つの因子が得られ，ある程度の信頼性と妥当性が確認された。またすべての項目の平均得点が増加しており，活動参加前後で因子得点に変化が見られた。さらに離島への理解についても多くの成果が得られており，児童の離島に対する理解促進に影響を与えていることが確認できた。限りある滞在時間の中で児童が離島の人々とふれあう機会をいかに確保するかという活動内容についての課題が得られた。

Ⅴ．今後の研究の課題

本研究では沖縄離島体験交流促進活動の効果について因子分析を用いて検討を行った。ただ対照群を設定しておらず，得られた効果が本活動のみによる効果なのか検証する必要がある。またより精度の高い調査を実施するには尺度構成，質問項目を再検討するという課題が得られた。活動に参加した児童の感想からは生活面や離島に対する考え方の変容など多様な影響を受けていることが推測された。改めて離島での体験活動を通じて児童がどのようなことを感じ，何を考えたのか，より詳細なデータを取る必要があるであろう。

【引用参考文献】

１．沖縄総合事務局（2010）沖縄における今後の離島振興策に関する調査

２．佐藤 正伸（2002）運動部指導における「生きる力」の育成と競技成績との，体育・スポーツ経営学研究 17(1), 25-32

３．橘 直隆･平野 吉直（2001）生きる力を構成する指標, 野外教育研究 4(2), 11-16

４．谷井 淳一・藤原 恵美（2001）小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発，野外教育研究 5(1), 39-47

５．中央教育審議会（2007）次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）

６．中央教育審議会（2013）今後の青少年の体験活動の推進について（答申）

７．中川 もも･岡村 泰斗･黒澤 毅･他2名（2005）長期･短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす効果，野外教育研究 8(2), 31-43

８．藤村 法子・水野 雄希（2012）「生きる力」を育む長期集団宿泊体験活動：その効果と課題 教育実践研究紀要 (12), 231-240

9．文部科学省（2008）平成20 年度文部科学省政策評価に関する調査研究事業報告書
10. 文部科学省（2008）豊かな体験活動推進事業の政策評価
11. 文部科学省（2009）農山漁村での宿泊体験による教育効果について
12. 文部科学省（2010）農山漁村での長期宿泊体験による教育効果の評価結果について

Effectiveness of Experience Activities on Remote Islands for Elementary School

HIRANO Takaya

Abstract

The purpose of this study is to determine the effectiveness of experience activities on remote islands for elementary school students. Participants were 194 5th-grade elementary school students from two different schools who joined the "Okinawa Remote Islands Experience Activities Exchange Project" for two nights and three days. The questionnaire used in this study was developed by the author and consists of an evaluation scale for the program and for the level of understanding of remote islands. Participants answered the questionnaire twice, before and after the program.

As for the results, factor analyses shows that there are four sub-scales: "independence," "cooperation," "interpersonal relationship skills," and "self-control." Additionally, average evaluation scale scores in all categories increased after the program. Lastly, due to the change in the perception of remote islands among participants by the end of the program, it seems that the experience activity in remote islands enhanced the understanding of remote islands.

Key words: effectiveness of experience activities, remote islands, elementary school students